

仏教から見たソローと山頭火

——色から音そして声へ——

新 保 哲*

Buddhist Ideas in the Works of Henry David Thoreau and the Poems of Santoka: On Colour, Sound, and Voice

Satoru Simbo

要 旨 句作の立場から「自然」について、山頭火はどのように理解していたのか。山頭火にあっては①色の世界から②音の世界への移行があり、そして最後に③声の世界へとはいつてゆく過程を意味する。言い換えると、まず最初に五感で感じ取った世界があり、次にその感覚、情緒を自我の執着から離れ、無欲・無我・無心に迄心が澄みわたり、最後に物、対象そのものと我とが完全に一つになること。つまり山頭火の中で自分と句とが一体となった境地になることを指す。それは悟りの境地でもある。それが山頭火の句作、魂の叫びであり、念願としていることでもあり、また覚悟の世界である。それは一句は一皮。その一句は古い一皮を脱ぐことを意味し、一句は一句の身心脱落、自己脱却（自己超越）であったのだ。

ソローにおいては自然観察眼は自然科学者の如く鋭く研ぎ澄まして、少しの変化も見逃さない所に彼の特色なり持ち味があった。だが、山頭火の「日記」に従い、自らが〈理論構成〉と記す、俳句性からその本質部分を解釈する語彙によれば私の意識の移行は、「単純化・求心的→直観——冴え——凄さ」「生活感情・社会感情・時代感情のリズム」というコトバで表わされる。声の世界が見えてくるには「自己を忘す」まで徹底行を要す。簡潔な表現で示せば、仏教とりわけ禅の語句〈即景即事即物即心〉〈即事而真、当相即道を体解せよ〉ということに尽きる。そうした観点からソローと比較して考察する。

キーワード 生きる意味 現世往生 永遠の今

はじめに

「天候や、昼夜の時間にかかわりなく、私は刻一刻をたいせつに生き、棒切れに刻み目をつけることによって、それを記録しておこうと心がけてきた。私は過去と未来という、ふたつの永遠が会うところ——まさにいまこの瞬間——に立とう。その線上に爪先で立とうとした¹⁾。」「人生をただ遊んだり、学んだりしてすごすのではなく、終始一貫して、人生を真剣に生きるべきだ²⁾。」

上記にあげたソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) の著『森の生活——ウォールデン』

* 本学教授 日本文化

(*Walden, or Life in the Woods*, 1854) の最初にくる章「経済」の中で記される「まさにいまこの瞬間」「人生を真剣に生きる」の言葉に焦点を当て、まずそこから論を起し本稿の展開をはじめたい。

人生が出す問いは、瞬間瞬間、その人その人によって全く違ってくる。したがって、生きる意味の問題は、具体的に問われるのでなければいけない。つまり、それは具体的なこと今において、そして他ならぬ個性ある自分自身において問われるものでなければならない訳だ。

そこで重要なことは、自分の持ち場、自分の活動範囲においてどれほど最善の努力を尽くしているかだということである。そして生活がどれだけ「全うされて」いるかという点に最大の価値基準があろう。その理由は、ひとりひとりの人間がかけがえがなく、代理不可能だからである。それは、人生に重みを与えている根本はひとりひとりの人生が一回きりだということだけでなく、一日一日、一時間一時間、一瞬一瞬が一回切りだということも、人生に恐ろしくも素晴らしい責任の重みを負わせている。生まれる事も死ぬ事も一度切りだとすれば厳粛そのものであり、そうした視座は決して看過できない。

ここで『夜と霧』(原題は『強制収容所における一心理学者の体験』)の著者として一般に日本でも良く知られているフランクル(Victor E. Frankl, 1905-1997)の考えを参考に提示すると、次の様な人生の示唆と洞察に富む魅力ある言い方がなされる。彼の著者『宿命を超えて、自己を超えて』には、「人間の根本構造は、とにかく意味がないとやっていけないようになっていると考えてまちがいないだろう。——そもそも意味というものは他人から与えられることはできない³⁾」と語る。すなわち意味は発見されなければならず、そのつどそのつど自分が発見しなければならない、ということである。つまり、意味を処方箋に書くことはできない相談である⁴⁾。そのためには、第一になんらかの行動をとること、またなんらかの作品を作り出すことによって、すなわち創造〔ソローでは想像力〕によって人生は意味で満たされる。また第二に、体験によっても、すなわち何かを体験することによっても、人生は意味で満たされる。その何かとは、物かも知れないし、人かも知れない⁵⁾〔ソローの場合は、それはウォールデンでの二年二ヶ月のインドの聖人・修行者を意識した実験的体験であり、自然、野生の中での感応道交の生活であった〕と語るのである。

以上の考え方の基盤に立って、ソローの崇高な精神、生き方を貫く、幅広い含みある思考を文章群の中から拾い出して、真に生きる意味が何にあったかを試論してみたい。

1. ソローの生きる意味

「朝は、一日のうちでもとりわけ記憶すべき時間帯であり、目覚めの時である。……もしわれわれが内なる「霊性」によってではなく、……⁶⁾」

「神聖で、曙光に満たされた時間を含んでいること……そのひとつの「霊性」は、ふたたび気高い生活を営もうと努力するのである⁷⁾。」

「詩的な人生、神聖な人生を送れるほど……目覚めていることこそ生きていることにほかならない⁸⁾。」

「私は深く生きて、人生の精髓をことごとく吸いつくし、……⁹⁾」

「遊ぶことが生きることにはかならない子供たちは、人生の真の法則や、それとの関わり方を大人よりもよく知っている¹⁰⁾。」

「一日を精いっぱい、楽しく生きようと心にきめて¹¹⁾」

「生であろうと死であろうと、われわれが求めるものは実在だけである。……時は私が釣り糸を垂れる小川にすぎない。私はそこで水を飲む。だが飲みながら砂底を見て、それがはなはだ浅いことを知る。薄っぺらな小川は流れ去り、あとには永遠が残る。私はもっと深く飲みたいのだ¹²⁾。」(以上、「住んだ場所と住んだ目的」)

「よしんば名声を獲得しようが、われわれはみな死ぬ運命にあるのだ。ところが真理を扱うことになれば、われわれは不滅となり、変化や偶然を恐れる必要はなくなる¹³⁾。」

たしかに、生物学的に見た人間の生命、肉体的な生命ははかないものである。肉体はなにひとつ残らずなくなってしまう。なのに、どれだけ沢山のものが後に残されるであろうか。そこで言えることは、仮え肉体がなくなってもなくなり、私達が死んでもなくなるもの、私達の死後もこの世に残るのは、人生のなかで実現されたことであろう。それは私達が死んでもあとあとまで影響を及ぼすからである。

ソローは、そうしたことを示唆、洞察し、「太古のエジプトやインドの哲学者は、神の像をおおうヴェール的一端をかかげてみせた。かすかにゆらぐ神の衣は、いまでもかかげられたままであり、私はいにしへの哲学者と同じように、神像のみずみずしい輝きに見とれてしまう。というのも、当時あれほど大胆にふるまったのは、その哲学者の内なる私だったからであり、いまふたたびその姿をまのあたりにしているのは、私の内なるその哲学者だからだ¹⁴⁾。」と記述している。ソローは時の刻みを忘れ去って、孤独と静寂の自然の中で瞑想・夢想にふけること、いわばまどろみの瞬間を大切にした。ソローが生き甲斐感を覚えるのは、一言でいって、日々の暮らしが心底より楽しく、刻一刻と新しい展望が開けて来て新鮮さを感じているときである。その為には自己の生き方が宇宙、自然の崇高な法則・精神に従って生きなければならない。

「私は東洋人の言う瞑想とか、無為という言葉の意味を悟った¹⁵⁾。」

「マツやヒッコリーやウルシの木に囲まれて、かき乱すものとなない孤独と静寂にひとりながら、日の出から昼ごろまで、うっとりと夢想にふけた。あたりでは鳥が歌い、家のなかをはばたきの音も立てずに通り抜けていった。やがて西側の窓にさしこむ日ざしや、遠くの街道をゆく旅びとの馬車のひびきでふとわれに返り、時間の経過に気づくのだった。」

「私の暮らし方には少なくともひとつの強みがあった。つまり、自分の暮らしそのものが楽しみであり、いつも新鮮さを失わなかったことだ。それはつぎつぎと場面が変わる、終わりのないドラマのようなものだった。……自己の天分になるべく忠実に生きてゆくならば、刻一刻と新しい展望がひらけてくるはずだ¹⁷⁾。」(以上、「音」)

2. 山頭火の生きる意味

ここで漂泊の托鉢乞食俳人・種田山頭火（一八八二～一九四〇）について触れ、彼の本当の生きていることの実感の楽しみ喜び、いわゆるアット・ホームな心で、心底から一瞬一時であっても至福に満ちた幸福感といえる気持にドブプリと浸れた時とは、一体どういう心の状態のときであったのかを考えてみたい。

すなわち、山頭火が自然を通して追究する処のもの、また到達する究極地は一体何かという問いである。それは簡単にいって、自分と自然とが完全に一体化融合してしまった身心一如の状態のときである。つまり、それは自分、我という意識・自覚が消えて無くなった、造化の心に帰一帰着し、遊化三昧境になってしまった瞬間の時であった。それがまさに彼が楽しみ、喜び、感謝の気持を心底から実感し、晴れ晴れと充実した至福の幸福感に浸れた、味えた時であった。

その幸福感を別な表現で言い換えたら一体どうなるのか。それは、一言でいって「旨い」「面白い」「楽しい」「嬉しい」という情緒感情が、予期せず突如、身心のうちから湧き出た瞬間であるといえる。ソローにおいては、それは Elysium（天国、極楽）の世界にひたれた神秘的体験の一瞬といえることができるだろう。

そこで彼が句作に情熱を徹底して傾注し、生き甲斐とするものは、創造的な句作に身心、精魂を打ち込み^が我の心を忘れ去ることにあった。つまり句作そのことが彼の人生の存在目的であり、人生そのものであり、それが彼の何にも増して最大の喜びであったからに他ならない。それを広義に解釈し根拠付けを敢えて試みれば、次の様な説明表現が可能であろう。

人生を意味あるものにできるのは、第一に、何かを行なうこと。活動したり創造したりすること。自分の仕事を実現することによっている〔創造的価値〕。第二に、何かを体験すること。たとえば、自然、芸術、人間を愛すること。愛情をもつことによって生きる意味を実現することができる〔体験的価値〕。第三に、第一にも第二にも属せず、たとえば自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命的な打撃であり、仮に避けられず逃げられない事実であっても、その現実の事実に対してどんな態度をとるのか。その事実はどう適応し、どう振る舞うか、それによって生きる意味を見つけだすことができる〔態度価値〕。その意味で、以上三つに共通する点は、そもそも人間の根本構造である意味というものとは他人から教えられたり与えられたりすることはできないということである。言い換えれば、生きる意味や満足は自分自身が一番よく知っており、自らが発見するよりほかないものだといえる。それも、そのつどそのつど自分で自主的に納得し、発見し見出さなければならない。しかも、これは年齢、教育、性別にも依存しないといえる。加えて、そこでは喜びを手に入れ自己を実現する道は、自己献身、自己忘却、自己脱却を経なければ実現不可能である。

そこで「生きる意味」「自己献身」「自己忘却」のキーワードの言葉を意識に留めて、ソローの一八五一年十二月十二日の日記（*Journal*）の一節を精読するとき、文脈を抜きにして自ずとその文意が極めて類似した表現内容となっているのが明確になってこよう。

「ああ懐かしい自然よ！　しばらく忘れていたあとで松林を思い出す。ぼくは、飢えた者がパン屑にとびつくように、それにとびつく。二、三〇日くらいのあいだ、土地の測量をし、粗末な生活を送っていた。食事さえも粗末なものにしていた。というのも、そのほうが仕事にふさわしい暮らしになるとわかっていたからだ。実際つまらぬ生活をしていたのだ。今晚久しぶりで室に火を焚き、自分の生活にもどろうとつとめた。宇宙を支配する力に結びつきたかったのだ。思索と献身の生活という深い川、町からはるか離れた^{ひとけ}人気のない肥沃な牧場をうねり流れる川にとびこみたかった。もう一度——あるいは今度こそというべきか——ぼくの至高の、もっとも内なる、もっとも神聖な性質にふさわしいことがしたかった。緑したたる岸の下の鱗しながら、水晶のような思索の中に身をひそめれば、さまよいくる人間は、水面に上るぼくのあぶくしか見ないだろう。ぼくは、ああ！　ものを考えることのできるくらい遠くに住みたかったのだ。ぼくの生活が、それにふさわしい流れとなり、ふさわしい水路を流れるようにと、閑暇と静寂とを望んだ¹⁸⁾。」

3. 仏教から見た山頭火とソロー

山頭火が「音でなく、声でありたい」と言う場合、世評雑音は意に解せず、また同調したりもせず、ただ己れ自身の心の中に生きづきうずく詩作の詩魂を、それも真実の叫び声に忠実に聴き、自らの生きる目標・意味にしていたからだ、と私は理解したい。そして、「私の傾能は老境に入りにしたがって、色の世界から音の世界——声の世界へとはいってゆく」（「其中日記」）と告白する言葉が実に味わい深く山頭火の心境を見事に語ってくれている。

それについて説明すれば、仏教では一般に色とは形あるもの、この現象界の森羅万象のすべてをいう。「色」とは梵語のルーパ（rūpa）の訳であり、元は rūp（形作る）という意味の動詞から作られた言葉である。したがって、色には〈形あるもの〉の意味が根底にある。また ruj（壊す）という動詞から作られたともいい、〈壊するもの〉・〈変化するもの〉の意味がある。要するに、形を有し、生成し変化する物質現象を指す言葉である。言い換えれば、色界の諸現象は眼・耳・鼻・舌・身の五感を媒体にすることによって捉えられる物質的対象である。

次に音の世界とは何か。音に関係して一番連想し易いのは、『法華経』の第二十五品の「観世音菩薩門品」に出てくる「観世音」（アヴェローキティシュバラという梵語を訳したことば）であろう。「観世音」とは、文字通り「世音を観る」ということであり、世間の衆生が救いを求めて聞くと直ちに救済する意味がある。つまりこの世の衆生のあらゆる悩み、声を聞くとともに、よくその悩みの原因本質を観察し、人それぞれの悩みに応じて自由自在の働きをする所の菩薩である。『観音経類解』には「世音とは十界三世間なり、音とは十界善悪の音声なり」と記されてあるように、あらゆる世界の音声を観ずることである。それは人間界のみでなく、地獄界をはじめとしたすべての世界を指していつている。

一方、十界とは、人間の迷っているものも悟っているものも含めたすべての境地を十種類に分けたものである。簡単にいえば、人間の心の状態を十種に区別したものにすぎない。すべての人が心

の中に十界の状態を可能性として具えている訳である。ご周知の如く、それは、地獄界・飢餓界・畜生界・阿修羅界・人間界・天上界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界である。そこで地獄界から天上界までの六道が凡夫の迷いの世界であり、後の四界が聖者の悟りの世界である。ここでそうした十界をソローに照らしてみたとき、彼の世界は一体どの境地に属しているのでしょうか。山頭火を仏教的世界観の十界のいずれかに当てはまるかを敢えて言えば、縁覚の境界に最も近いと考えられよう。しかし普段の日常生活での山頭火の心の世界は明らかに迷いの凡夫人の心の世界の領域にある。しかしこと俳句の心の神域に迄達し、入我我入、無我無心の三昧境に完全に到達した悟道的境界に超出没入した時は、それはまさに縁覚である。

縁覚は他の教えを聞いて悟る声聞と違い、他からの教えの影響によらず、自ら縁起の道理を観察することによって悟りを開くとされる。また他を救済する仏陀と違って、自分だけの悟りを目的とし、山林に隠遁して世を離れ、世の人びとを指導救済することをしない独善者であるとされる。すなわち、縁覚〔(梵) プラティエーカーブッダ (pratyeka-buddha) の新訳では独覚^{どっかく}といっていることが語意として相応しい〕。それはいわゆる十二因縁を観察して迷いを断ち、理想を悟る(断惑証理)から縁覚といわれる。もっと砕いた言い方をすれば、たとえば飛花落葉などの天地自然の変化という現象的外縁によって迷路開明して悟るというか、安心立命を得ることが縁覚境と解されよう。しかも師匠なくして独りで悟道を得るのだから縁覚とは独覚の別称のことである。

そうすると、ソローを仏教思想の中で位置づけたとき、山頭火と同じく縁覚という船に同乗していると考察可能である。因みに、ここで補足的説明を一言付して置くなら、古来、声聞の教えは四諦八正道であり、縁覚の教えは十二縁起であり、仏菩薩の大乗仏教の教えは六波羅密(布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧)である。しかし仏教の歴史の上では縁覚は実際に存在しないし、縁覚独自の教えというものもない。したがって、仮に四諦八正道も十二縁起も六波羅密も、すべてインドで生まれた仏教の基本的な教理教説であって、それがそのままソローや山頭火の行者・修業者からみた比較に、そうした教理教説が対應對照されることはなく、むしろ不適當である。ただ部分部分を取り挙げその仏教思想に照合し考察する場合、理解が一層深まることは確かである。たとえば八正道の最初に来る「正見」とは六波羅密の最後の6番目に来る「智慧」に該当する意味内容である。また、縁覚の場合、独覚すなわち無師独悟という捉え方・理解は、いずれもソローや山頭火の自然観や思想を追究するときに十分に参考参照に足る仏教思想である訳で、ソローと東洋思想に関しての研究を試論する際欠かせないことは明瞭である。

ところで独覚とは、仏の教えに依所しないで自ら道を悟り、静寂な孤独を好むために、説法教化をしないとされる一種の聖者である。ここで誤認のない為に付言すれば、山頭火もソローも決していわゆる聖者と称する部類には属さない。そのことは数多くの日記や日誌から明白である。しかし、ソローはウォールデン湖畔で寓居していた一時期は行者・聖者としての意識自覚は心の隅に持っていた。正確には、インドのガンジス川の聖者やヨーガ行者又は賢者と言われる人を目標に描いていたことは事実であった(「経済」参照)。たとえば、バラモン哲学、インド思想、とりわけ奥義書(Upanisad)などの最大特色は、人と大自然との調和、個人と宇宙との調和にあり、梵(ブラーマン)と我(アートマン)の一如を説く処にあるからである。また更に、バガヴァッド・ギータ

一（Bhagavad Gita）からの強い影響が認められる。彼は、人間の本務を果たす唯一の道として無執着の行為を強調したこの書を受読し、そこで説かれる正智による智行合一の解脱道を重要視した。山頭火においては、形の上では出家修業僧であり、仏陀時代の原始仏教僧の姿で一鉢を手に持った乞食托鉢の仏行をして遊行する処は相似している。しかし、僧伽（Saṅgha サンガ。僧伽とは衆とも訳され、出家者の集団を意味する。釈尊がベナレスにおける最初の説法で五比丘を教化し弟子とした。僧伽という集団はここから始まる）という形ではない。

また更に、たとえば彼の日記には〈四弘誓願〉を事あるごとに唱えている姿が浮かびくる。云く、「いつも懺悔文をとふべし、四弘誓願を忘るべからず」（『行乞記』昭和六年十二月三十一日）。とはいえ、菩薩が起こす四弘誓願すなわち「衆生無辺誓願度」（一切生きとし生けるもののすべてを悟りの彼岸に渡そうと誓う）・「煩惱無量誓願断」（一切の煩惱を断とうと誓う）・「法門無尽誓願学」（仏の教えすべてを学び知ろうと誓う）・「仏道無上誓願成」（この上ない悟りに至ろうと誓う）であるが、この菩薩心に燃える〈度・断・学・成〉の実践修行は、山頭火においては正直いって気合だけに終始して、空しく響き伝わってくる感は否めない。

ではソローにおいてはどうか。彼はキリスト教文化の影響を幼少より受けた。とはいえ、時代の超越主義作家の一群にあって、インドのパラモン教の根本聖典としてのヴェーダ聖典は英訳本で当時読んでいた。また中国の孔子、孔子の弟子の曾子、孔子の孫の子思・孟子等の教えの古典本も目を通して、東洋思想に関しての知識は良く理解していた。しかし仏教となると、ソローには直接に言及引用したりした箇所は作品の中から散見できず、したがって仏教思想の影響は受けていないことは明瞭である。それゆえ、ソローと〈四弘誓願〉に唱われる大乘仏教の慈悲救済の菩薩精神とが結び付く接点は見当たらない。只、本来の仏教では禁酒の戒律が固く厳しく説かれている。山頭火はそれさえ守れず、つい酒を飲み過ぎ幾多の大きな不始末を起こした苦い体験を持つ。そして慚愧心に駆られて仏前にて自戒を立てるが、またも直ぐ破られ自己コントロールができない。いわば破戒僧なのだ。彼はアルコール中毒に罹っていた。そうした点については山頭火よりソローの方が遙かに仏教僧仏道者に近い人であった¹⁹⁾。

独りして師のない様をもつ〈縁覚〉には、ひたすら独り進んで積極的に善根功徳を積む仏道行為は山頭火もソローにも見当たらない。しかし山頭火は句作を通して、ソローは瞑想と想像力を通して、師なくして俳句の真髓極地を瞬間瞬間覚ることがあった。また、同様、ソローにも師なくしてウォールデンの自然観察生活の中で「神聖で、曙光に満たされた時間²⁰⁾」「靈性に包まれた感覚²¹⁾」「神々の寵愛を身に一杯受けている気持²²⁾」「永遠の生命の泉を感じる²³⁾」「生命が躍動する²⁴⁾」こと等が只一人勿然として目醒め悟ることもあったのだ。

一方、縁覚の人はただ自利行のみあって、利他の心がないから大悲心によって衆生を救うことができないで仏果に至り得ない。その意味上に関しては、正しく山頭火もソローも確かに当てはまる部分が多い。もっと厳密に言えば、山頭火には利他行は無くはなかったが、それは『観音経』『般若経』『修証義』等を托鉢のときに声に出して誦経する位で、無私無欲に徹し菩薩乗²⁵⁾の如く大いなる燃えるような慈悲心・菩薩心をもって利他救済を実践行道するという型では全くなかった。彼は「或る時は菩薩、或る時は鬼畜、それが畢竟人間だ」（『行乞記』昭和五年四月二日）と自分自身

の心の内を赤裸裸に明かして語る。また時には「アルコールのおかげでグッスリ寝ることが出来た。昨夜の分までとりかえした、ナムアルコールボーサー（補記——南無アルコール菩薩）」（同上）とうそぶいてみたりする。そこには菩薩の名が唱えられてはいるものの、結局は自己自身の欲望満足であり、利他行無私救済、上救菩提・下化衆生の仏道精神の根本はどこかに飛んで行ってしまった感がする²⁶⁾。

他方、ソローには彼の修行は他者利益、他者救済を目的とした孤独な独居生活ではなく、また自己の宗教的体験生活を実験記録として意識的に綴ったものがその著『森の生活——ウォールデン』であり日記であった。読んで分かる如く、明らかにいわゆる仏教的根本思想の慈悲につながる利他行を目的とした生活信条では全くなかった。ただ、キリスト教思想から影響されたと見る博愛精神は強く読みとられる。

山頭火が追究した処の世界は、端的にいて、自己自身の内に巣くう我欲の煩悩との熾烈な格闘を通して、少しでも心の濁れる水が流れつつも澄んで行くプロセスで努力精進している姿勢であった。簡単平易な山頭火自身の言葉を借りると、「いひかえれば at home な情緒が第一要件である」（同上）と記す自由律俳人の胸のうちを語っている。山頭火は心身共に爽やかとなりアット・ホームに浸り、朝風呂、朝酒、又更に温泉につかり「これで私は極楽の人となった」「一風呂浴びて一杯ひっかける。そして一服やるのは何ともいへない、まさに現世極楽だ」（同上）と日記に吐露し綴るように、俳人としての天国気分を心の底から身心共に十分に味わい満喫するにあった。その意味では山頭火は死後往生型ではなく、現世往生型の人間であり、根っから肉体的満足感、豊かな心の全感性を一番に重要視したというより、それ以外に考えをしなかった。また、食に関しては決して美食家ではないし、生活そのものが節約の日々連続で余裕すらなく、極貧の生活を生涯過ごした。乞食僧山頭火には生活の為の支援金を長期間出し続けてくれた友人で医師（7歳年下）木村緑平氏がいた。山頭火がお金に困っている時、金をねだって来た時にはすぐ為替を封入していた。そうした中にあっても好きな飲酒とタバコだけは止めなかった²⁷⁾。

「彼は職無しとして育った。彼は結婚しなかった。彼は孤独に生きた。彼は教会に決して行かなかった。彼は投票をしなかった。彼は国家に税金を支配うのを拒否した。彼は肉食をしなかった。彼はワインを飲まなかった。彼は一度もタバコを吸わなかった。そしてしかも自然主義者であった。彼は罌も鉄砲をも用いなかった²⁸⁾。」（『ソロー』より著者訳）

「わたしはお茶もコーヒーものまず、バターやミルクや新しい肉も摂らないで、そういう物の代金を稼ぐためにはたらかなくてもすむこと、そして、わたしはあまりたくさんはたらかないから、たくさん食わずにすみ、食費はごくわずかで足りることを話した²⁹⁾。」

「同時代の多くの人々と同様わたしは長年のあいだ動物食、茶、コーヒーその他をめったに用いなかった。それらのものに害をみとめたというよりは、ただ気持に不快だったからである。動物食の嫌悪は経験の結果ではなく一つの本能である。低い生活をし粗食をすることは多くの点において一層美しいように思えた³⁰⁾。」

「わたしは水こそ賢者の唯一の飲みものであると信じる。酒はそんなけだかい飲料ではない。

そして朝の希望を一杯のあついコーヒーで台なしにし、夕べの希望を一椀の茶で台なしにすることを考えても見たまえ！ ああ、それらで誘惑されるときに私は墮落することか！ 音楽でさえ人を酔わせることがある³¹⁾。」

上記の文章を読むと、ソローの禁欲生活がここに顕著に表明されている。それは飲食に限らず、衣服にも、また住居にも同様に言える。つまり生活方法が一貫している。同時に簡素性の精神が十分に読み取られる。また、彼が禁欲的生活を好んだという理由の一つには、自己の身体の弱さ、胃腸が丈夫ではなかったからでもある。端的に言えば、自己の身体がカフェインの強い嗜好品を受けつけなかった。それは、それらのものに害を認めたというより、ただ気持に不快感が伴ったからである。それは自己の健康を保持するための、身体自身のもつ動物的保護本能的な自然の働きからきている問題であろう³²⁾。

ソローがキリスト教的な教義的解釈ではなく、今世此世において天国そのもの、またその縮図のイメージの世界を体得することを目指したとするならば、釈尊においては天国と呼ぶ言語概念も類似概念も一切見当たらない。釈尊は輪廻の苦界を脱し、煩惱のままの姿でもって八正道を保ち、人生の苦悩の根本原因である生・老・病・死の四苦、さらに愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦^{あいはつりく おんぞうえく くふとつく ごおんじょうく}の四苦八苦から解放されることを追求した。しかし翻って現身のままで宇宙の真理と合体し目醒め涅槃寂靜に至るとする悟りにおいては、ソローが期せず感得した宗教的体験・絶対的体験が極めて近接類似した、同一線上に位置していたといえるであろう³³⁾。

ところで、たとえ『森の生活——ウォールデン』の著述内容が東洋的思想傾斜への傾向を認め窺えても、それがそのままに西洋思想と同一的評価をもっていたとはいえない。まして東洋思想が西洋思想以上にソローの精神的支柱になっていた、とは尚更考えられない。しかし本質的部分からいえば、彼が東洋に傾倒思考するのも、キリスト教にはみられない東洋の智慧を知り、知行合一するためであった。そして想像を逞しくして言及すれば、ソローがニューイングランドのインディアンの神々、ギリシアの半獣神、そしてヴェダ（Veda）にみる梵（Brahman）を讃歌し、十三世紀のベルシャの詩人・神秘主義者シェイク・サーディ（Sheik Sadi, 1213?～1292?彼の著者『グリスタン』（『薔薇園』）は有名である）や十五世紀から十六世紀にかけてのインドの宗教思想家カビール（Kabir, 1440～1518）、そして中国の孔子、孟子、曾子の思想の影響をかなり強く受けたのも、彼のキリスト教への反抗精神のうらがえしが積極的に現れたと見て取れる。また同時にニューイングランドという土地に育ち、恵まれた豊かな自然（インディアンはこの地を平和や調和という意味でコンコードと呼んだ）と四季のはっきりした自然の循環と土地柄がもつ宗教的風土性そのものから源流していると捉えることができる³⁴⁾。

さて、元に戻ると、身心共に爽やかとなりアット・ホームに浸ること、朝風呂ならぬさわやかな朝の沐浴の一瞬一時に、彼はこの世で天国、極楽気分を身心共に感じとり、山頭火と同じく死後往生観など全く持たなかったかの様に現世往生・現世極楽の体験を存分に味わい尽くした。ソロー流に表現すれば、梵我一如の神秘体験である。彼の生き甲斐感、幸福感、満足感とは、より崇高な精神、崇高な法則を発見感得し、小春日和のようなさわやかな柔らかな光に完全に包み込まれて自分

の存在感すら忘れるような、そんな至福の法悦にひたることにあった。他方、山頭火においては句作して満足のいく俳句を練り出すことが人生の喜びのすべてであった。ソローにおいては人間の文明の手が加えられていない原始時代の人間の感情に戻ることに、そして野生的な人間生活に憧れ続け、その生き証人はインディアンの生き方に認められ、白人がまだ入殖しない太古の原始さながらのインディアンの民族生活の中で、大自然の中にエラジカ（moose）が群れ集う平和で牧歌的生活を永遠に夢見ていたのであった。

山頭火は時折り「しみじみ仏陀の慈悲を思ふ」（『行乞記』、昭和七年一月二十日）ことや、また人から求められ「どうでもといはれて、病人のために読経した、慈眼視衆生、福聚無量、南無観世音菩薩、彼に幸あれ」（同上、四月十四日）と御経文を誦する。一方、ソローにあっては慈悲救済心から読経するとか、バイブルを人に読み聞かせ、神の天国の世界を熱心に教え説くということは全くなかった。また、破戒僧山頭火が仏僧の根本精神を唱って「物にこだわるなかれ、無所得、無所有、飲まないで酔ふようになれ」（同上、昭和七年、三月一日）と自戒反省しているが、物にこだわらない、無所得、無所有の物欲から離脱しようとした、あるいは離脱したそうした無欲の精神を生き方・信念として持ち合わせていたことは、ソローと同じである。ソローは衣・食・住に関して言及すれば、最低限度の生きて行くだけのものがありさえすればそれで十分満足したのであり、生活信条とした。すなわち、ソローは物質面において食物・住居・衣服・燃料、その他も含めた生活必需品の簡素性を強調した。また、精神面での純真で素朴（「訪問者」参照）な簡素性、単純さを徹底して追求した。そればかりか目を自分以外の他者や社会にも広く向け、批判的精神を常にもって、ソローは強く社会全体の贅沢をいましめ、警告を発し反省をうながした。と同時に、単純なる生活（simplicity life）を提唱した。それは、自己に対しても不動なる生活信念として厳しく律するものであり、その理想理念を東洋の哲人・賢人にみいだしている。

山頭火は生涯の友、人生そのものの俳句に、生きる句作の中で、自我〔身口意の三業合致（『風来居日記』昭和十四年八月十九日）の下で〕と自然とが融合一体化することに努めた。すなわち、それを即心即仏の境界〔補記——岩に波が、波が岩にもつれている。それをじっと観ていると、岩と波とが闘っているようにもあるし、また戯れているようにもある。しかしそれは人間が勝手にそうみるのであって、本来は岩は無心、波も無心、非心非仏、即心即仏である〕として捉えるのが山頭火の人生観・自然観・世界観に通ずる世界である。

更に詳しく言い換えれば、自然とは〈即景即事即物即心〉の世界であるが、究極地は「有仏のところ留まる勿れ、無仏のところ走過せよ。（趙州）」と、山頭火の追究の奥は深く、そこには期せずして密教における三密定が窺えるのである。それは主に密教で用いられる。人間の身口意の行為は仏の三密にかなって修められ、またそのかくされた本性においては仏の身・口・意の三業と同じであるから三密という。仏の三密は全宇宙に遍満しているが、具体的には四種曼荼羅や仏・蓮華・金剛の三部などと示される。衆生のそれは身に印契を結び、口に真言を誦し、心に本尊の大日如来を観ずることをいう。

4. 太陽の光に照らされての解脱感・至福感

ソローに関して彼の自然に対する感情は、畏敬の念に近い宗教的情緒を帯びた、いわばそれと表裏一体を成す恩恵という言葉に代表される。すなわち明るく楽天的現世浄土観が窺える。加えて自然の恵みに対する感情情緒、気分は、彼の諸作品の随所に散見できる。それを言葉に換えれば、春（spring）とか光（light）に象徴化されるものだ。人間のみならず、地上の生物は一つの例外もなく、太陽の光線と放射線の恩恵にあずかり、生命の営みを行っている。どんな自然の生物の生活や生命リズムも、太陽リズムに厳密にその影響を受け、従っている。例えば、太陽が上れば、人間をはじめ生き物は眼を醒まし活動を始め、太陽が沈めば生命力を蓄えるために休息をとって睡眠に入り熟睡する。そこで太陽を象徴する光とは密教での大日如来の光、遍照と重なるようにも理解される。

例えばソローが、春の暖かい陽光に全身があたると、我心身が解けてしまって自分という存在が無くなってしまったと語っている。また「恋愛の情は、焰であるのと同程度に光でなければならないのだ³⁵⁾」（「恋愛論」）「ぼくは、日没を見るごとに、太陽が沈んでいくところと同じくらい遠くの、美しい西部に行きたいという欲求に駆られる。太陽は毎日西に移動し、従え、諸国が従っていく、偉大なる西部開拓者である。ぼくたちは、太陽の最後の光で金色に染められた地平線上の峰々を、それが実は幻想の産物にすぎないかもしれないのに、一晩中夢に見る³⁶⁾。」とも記す。「古くさいラテン語を使うならば、『光は東方より、実りは西方より』ということだ³⁷⁾」「ぼくたちの哲学が夢想だにしなかったものが宇宙に存在する」ということを発見したときの新しく大きな驚きという形で、一番明確になるのだと思う。それは、太陽による霧の照明である。人間が太陽をまともに見て平静かつ無事ではいられないように、人間はこれ以上高等な意味で「知る」ことはできないのだ³⁸⁾。」「（散歩）」等と記す文章の背後に、太陽の如く、それも偉大な輝くもので大遍照（空海が唐において青竜寺の恵果阿闍利のもとで灌頂を受けたさいに授かった灌頂名は〈遍照金剛〉であった）の意味をもって、のちに宇宙の根本の仏「大日如来」と称する密教と重なる象徴的イメージ世界が想定できる。

また一方、山頭火が幸福感にひたった時とは、特に我と自然とが完全に一体化融合した瞬間であり、句作の一瞬であり、温泉の朝風呂につかった時でもあった。その幸福感を言葉で感情表現化すれば、「旨い」「面白い」「楽しい」「嬉しい」「美しい」が挙げられる。その中から生き甲斐感・満足感・充実感を伴う「楽しい」という感情的言葉を取り上げ、ソローは一体どうした場合に「楽しみ」と感じ取ったのかを、『森の生活』から二箇所拾ってみたい。それは「音」の章に、「自分の暮らしそのものが楽しみであり、いつも新鮮さを失わなかったことだ³⁹⁾」「刻一刻と新しい展望がひらけてくる⁴⁰⁾」と記す様に、群集、大衆の集団社会の中より、個人を大切に自分自身のライフ・スタイルの中にこそ「楽しみ」を常に見い出していたからであった。その宝庫は原野の野性の動植物をはじめ、色々な生き物が生息し尚且つ遅く生き、野鳥の美しい歌声があたりから刻々と千変万化する音の響き、声の響き、神々の合唱の声を聴覚一杯に聴き入ることにあったのだ。

「楽しみをそとの世界に求めて、社交界や劇場におもむくひとびとに比べると、私の暮らし方には少なくともひとつの強みがあった。つまり、自分の暮らしそのものが楽しみであり、いつも新鮮さを失わなかったことだ。それはつぎつぎと場面が変わる、終わりのないドラマのようなものだった⁴¹⁾。」

「自己の天分になるべく忠実に生きてゆくならば、刻一刻と新しい展望がひらけてくるはずだ⁴²⁾。」

5. ソローの音・声・響きの世界

ソローにおいては、音とは種々様々のものから聞きとれる音響、歌、合唱の数々であり、見方によれば聴覚型人間としてソローを捉えた方が相応しい一面を覗かせる。〔弘法大師空海は、「しょうじ声字実相義」において真言を唱えるとき、声、音、響きを大事にするように教えている〕それは何よりも感度の高い両耳の器官と、研ぎ澄まされた敏感で感性の豊かな心意識作用が働いて、そして柔軟性のある心の下地をソローが天性の素質として持っていたからだとは私は推測する。そうした音、声とは、たとえば風の音、野鳥の歌い鳴く声や響き、馬のひずめの音、文明の力である鉄道機関車の発車のベルの鳴り響く音、貨物列車がガタゴトと通過する音、家畜列車でのヒツジ、ウマのひしめく音、クモの巣にひっかかったハエが立てるブーンブーンという音、イヌの遠吠え、ウシガエルの合唱等、以上は「音」の作品の中に記述されるものである。

ソローはウォールデン池での独居生活の間に、毎日の様に瞑想にひたった。そうした我を忘れ去った没我体験は数え切れない程多くあった。ソローの瞑想を妨げるものといえ、遠くの街頭をゆく馬車が荷馬車のかすかな響き音であったり、定期的には機関車のベルの音や貨物列車の通過音であった。これは明らかに人間の文明の力から生まれた音、響きであり、そこから派生する様々の木霊^{こだま}である。しかし、また一方で、「鐘の音」に関しては、それは原生林にもちこむのにふさわしいとして「かすかな、心地よい」いわば〈自然の旋律〉である、とソローは云う。しかも、森を通り越えて、最大限の距離をへだてて聞いた場合には、それは時に〈宇宙の堅琴^{リラ}の振動音〉ともなってソローには聞こえた。聞き方によっては、それは調子をととのえた谷から谷へと響きかける「木霊」であり、森の精が歌う、いわゆる森の声となって、ソローの耳に達した。言い換えれば、それは「自然」が発するひとつの声と感じられるときもあり、その時は心から深く感謝したい気持ちにかわるのであった。

ソローの音や声、響きに関する受け留め方は、或る意味を伴った人間感情として理解することがあった。時にそれは「夕べの祈りをさえずっていた」と彼は捉えた。また、たとえば「音」の章で、ソローは「夏のある時期、夕方の列車が通りすぎたあとの七時半になると、きまってヨタカが戸口のそばの切り株か家の棟木の上に止まって、半時間ほど夕べの祈りをさえずっていた。彼らは毎晩、日没にあわせて、一定の時刻の五分以内に、ほとんど時計のような正確さで歌いはじめるのであった⁴³⁾。」と記述している。

ソローは、フクロウの鳴き声が、悲嘆にくれる女たちのように、陰気な叫び声として聞き捉え

る。すなわち、そのことは天上的な恋の苦しみと歎びの思い出に浸りながら、地獄の森でたがいに慰めあっている声として聞きとる。しかし、「それでも私は、ときとして音楽とか小鳥のさえずりを思わせる彼らの嘆きや、愁いに満ちた応答が森をふるわせるのを聞くのが好きだ⁴⁴⁾」というのである。それは一言でいって亡霊の声として聞く。つまり、地獄に墜ちた人間どもの卑しい亡霊であり、陰湿な予言としても耳に響き訴えかけてくるのである。フクロウが、オー・オー・オーと鳴く淋しく悲しい声のひびきは「うまれてくるんじゃないよおー」と、しかもふるえる声で真剣にもう他の一羽が受け答えしているように、明らかにそこには音から叫び声へ、そして人間のある感情へとその意味的解釈が暗示されている。すなわち、こうした「自然」の音が、人間の断末魔のうめき声とも、また、それは人間のすすり泣きともつかぬ哀れな弱々というめき声のようにも思える、とソローは「聞き^な做し」として自己解釈するのである。

ところで、自然の生物の音、声を聞いて、そこから人間の喜怒哀楽の感情・情緒・気持・気分を連想し組み摂る自然観察の方法は、日本の俳人山頭火と比較すると、まったく異なる。彼は、自然や物の対象そのものに没入し透視する。そして自分と自然とが完全に融合一体化し、いわば自然即自己、自己即自然の境地になり切って、造化の心に帰一帰着することを無上の喜びとして吐露する。彼は、俗物的、矛盾だらけの人間の心を映し出すだけではないのである。たしかに一方で、山頭火は、己れが我欲に満ちた矛盾だらけの煩悩多き者と捉え且つ日記に綴り告白する。しかし、優れた満足のいく秀作ができたとき、また人生を深く味あえた時にはその心境は禅者の悟りに近く、俗物的残存は微塵も認められない。正に「こころおちつけば水の音」（昭和十一年）「濁れる水の流れつつ澄む」（昭和十五年）句の世界である。つまり生涯をかけて求め到達した境地とは、自分の生活、生き方のすべてを受け入れ肯定し、自然にまかせることのできる「流れつつ澄む」心境縮鏡である。そこには「利那の永遠」「全と個」の透徹した句境が表現されていると見ることができる。

他方、ソローの自然観察眼の基底には、一八四〇年十月十一日の『日記』*Journal*を読むと、

「ぼくたちは、推論や演繹、数字を哲学に適用することなどから学ぶのではない。自然との直接の交わりから学ぶのだ⁴⁵⁾。」

と記されている。自然との交わり方、そしてそこから学ぶ意味内容は、山頭火と余りにもかけ離れていることに実は気付く。山頭火が自然の山中で感じとる一大パノラマの情景や心は、ソローのように多重構造・複眼的、叙述的（実に詳細にわたり且つ説明的）な世界ではない。すなわち、山頭火の自然観察眼の連想を脳裡に収め、感じとった印象風景を表現記述したのを見ると、次の様にメモ書き風に記録されている。

「霜——うらゝか——雲雀の唄——櫨の並木——苗木畑——果実の美観——これだけ書いておいて、今日の印象の備忘としよう⁴⁶⁾。」

「汽車は山また山、トンネルまたトンネルを通った、いちだなとしげをかとの間は八マイル九分という長さだった、歩いた道はもっとよかった、どちらを見ても山ばかり、紅葉にはまだ早

いけれど、どこからともなく聞こえてくる水の音、小鳥の声、木の葉のそよぎ、路傍の雑草、無縁墓、吹く風も快かった⁴⁷⁾。」

山頭火の俳句日記を散見して感ずる点は次のことである。そこには、視覚から入って、いつの間にか回りの周辺から聞こえてくる水の音、小鳥たちのさえずりの唄や合唱の声、また木の葉が風に吹かれてそよぐ音、木々がこすれ合って響く音響等が、自然に耳に飛び込んできて、いわば聴くともなく聞くのである。それは意識的に心を集中し耳をそばだて傾聴し聴き取るという在り方ではない。いってみれば、聴こうと意識自覚せずして、自然と今・ここに居る自分の心の中にとどいてくる音であり、声なのだ。そして萩の花が風に吹かれ揺れる姿を見ると、そこから俳人詩人らしく意味を最も短い言葉として捉え理解し汲みとるのである。山頭火は、それを「日本的な草花」「すべてが単純で清楚で気品が高い」「可憐さ」「しとやかさ」「したしさ」「うるはしさ」を秘めていると感じさせられてしまう。そこにははっきりと直感によって生命の息、ゆらめき、動きを一瞬に感じ取る訳なのだが、俳人山頭火においてはただそれだけの意味でしかない。

ソローの自然観察眼は科学的客観的で、長々とした叙述形式で詳細な説明が顕著であり、それが特色である。すなわちソローは「多」を徹底追求するのに対し、反対に山頭火はすべてが「一」へと集約・帰結される。それは俳句の心の核心へと向けられ、最小限度な短い言葉と成って、視覚から聴覚、そして身心一如、自己即自然・自然即自己の自他一如、混然一体と成った、我や我欲が無くなった処の心を素直に歌うのである。そこには明確に今・ここに自分が生命を与えられ生かされ、一瞬一瞬燃焼して居る実感を感じ取り、無上の喜び、感謝一杯の気持が湧き出るとともに、自然に対しても人に対しても正直・誠であらねばと思う。過去の記憶の想いも、未来に対する不安や期待も、すべてがこの現在の一瞬時の「まどろみ」の中に融け込んで、

「うららかな、幸福を感じる日、生きているよろこび、死なないよろこび⁴⁸⁾。」

と記す如く、ひとつの実存的感慨となって表現され吐露される。そこに山頭火とソローとは決定的に違った異質でもある精神世界、構造自体の特色が窺えるのである。

翻って、心を無心にして考えず静かにじっと雨音を聴いていると、我知らずに自然自然に心が落ちていくのを感じる。そこには禅語の「感応道交」の世界が働いている。

山頭火は旅の宿屋にいて「波の音と雨の音と、そして同宿のキ印老人の声で眼覚める⁴⁹⁾」(「行乞記」(二)昭和六年一月三日)と記す。この眼覚とは、また同時に森羅万象の自然の森の中にあっては「私が欣求してやまないのは、悠々として迫らない心である、渾然として自他を絶した境である⁵⁰⁾」という処に目標がある。その根源は彼の信念でもあり、そうした中から生まれた表現が俳句であると言っている。そして五十歳頃になると、「生きるも死ぬも仏の心、ゆくもかへるも仏の心⁵¹⁾」(「三八九日記」昭和六年二月三日)へと心の落ち着きができてくる。つまり、次に示される四弘誓願に詠われる仏道的生活を、心の中では常に忘れず希願されてくるのである。「衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断 法門無量誓願学 仏道無上誓願成⁵²⁾」

6. ソローの日記より

ソローの独居生活日記と山頭火日記を比較する中で、聴覚から悟りへの移行を引用文を示し試論考察してみたい。

ソローはその著『森の生活——ウォールデン』で、様々の音や響きを聴いた。「音」の章をざっと散見しただけでも、20余りの様々な種類の音を記し留めている。ソローは、「生命が躍動する」自然において「四季を友として生き」「永遠の生命の泉があふれ出ている場所」(以上、「孤独」)で、自分を他人と比べ、自分のほうが神々の寵愛を身に余るほど受けているような気が幾度もした体験をもつ。そればかりか同胞がもっていない許可や保証を、神々の手から授けられたうえ、特別に指導され、保護されているような気分にもなった。したがって、ソローは、淋しいと思ったことも、孤独感にさいなまれるということもまったくなかったと告白している。また、ソローは森に住みはじめて二、三週間たったころ、

「雨がしとしとと降りつづいていたが、突然私は「自然」が——雨だれの音や、家のまわりのすべての音や光景が——とてもやさしい、情け深い交際仲間であることに気づき、たちまち筆舌につくしがたい無限の懐かしさ親しみがこみあげてきて、大気のように私を包み込み、人間が近くにいればなにかと好都合だと空想したことが馬鹿らしく無意味に感じられた⁵³⁾。」(「孤独」)

と述懐している。また更には、

「なによりも楽しいのは、春か秋に^{ながあめ}長雨をともなう嵐がやってきて、午前も午後も家に閉じこめられ、絶え間ない風のうなり声と、叩きつける雨の音に心を慰められているときだった。そんな折りには、夕暮れがはやばやと長い夜を招き入れるので、さまざまな思想がゆっくりと根を張り、花ひらくのであった⁵⁴⁾。」

とソローは語る。それは人類誕生以前の太古から奏でられている、いわば永遠の旋律、リズムであり、いわゆる「宇宙の振動音」なのである。ソローは、雨だれの音から想像を逞しくして、〈宇宙的意識〉とか〈宇宙的感情〉とか呼ばれるものを、時折り心に抱いたと秘かに漏らしている。それは書物の文字の中からでは決して体験できない神秘体験であった。ソローにおいては一日の中でも朝と宵が一番快いものであった。この事実をウォールデンの自然、野性の中で発見し、彼はそうした中で「魂にさしこむ光」「夢のような光」を感得した時に深い感銘を受けたのであった。

結 び

最後に、聴覚の人間の山頭火における「雨、雨の音、雨音」に関して「日記」の中から幾例文を拾いスタートさせ、一体自然とは何かをまとめてみたい。

「雨の音は私の神経をやほらげやすめてくれる、雨を聴いていると、何かしんみりしたものが身ぬちをめぐってひろがる。……⁵⁵⁾」(『ぐうたら日記——其中日記(四)』昭和十年四月四日)
「宵からぐっすりと寝た、ランプも点けなかった。夜中に眼が覚めて、雨音虫声の階調を傾聴した⁵⁶⁾。」(同上。昭和十年九月十六日)
「雨の音が私を一しほ落ちつかせてくれる、雨に心をうたせてゐると何ともいへない気持になる⁵⁷⁾。」(同上。昭和十年八月三十日)
「竹の葉にばら／＼雨のよろしき⁵⁸⁾。」(同上。昭和十年八月三十一日)
「若葉にふりそぐ雨の音はよい⁵⁹⁾」

山頭火において「自然」とは何か。最も短い簡潔な言葉で表現すれば、それは〈即景即事即物即心〉〈即事而真、当相即道を体解せよ〉の世界を意味する。つまりこういう事を言っていると私は解釈する。

周知の如く、山頭火は、山、林、森、河岸、植物、動物、昆虫、虫（油虫だけは一番嫌いだと言記に記してる）、野鳥、空、月、雑草、野草、野の花、水、雪、雹、霰、雨……等をこよなく愛した。そしてそうしたものを題材にして「いのちのうごき」「いのちのかがやき」「自然のうつくしき」「如々として遊ぶすがた」「ゆらめき」が身心に染み入る一瞬に、その感動なりを、山頭火は「ぐっと掴んで、ぱっと放つ」のである。すなわち、そこに句作が生まれる訳であるが、即事が真となり当相が道とまでなるのであった。

言い換えれば、それは「人の本道であり浄罪の真道である⁶⁰⁾」と、山頭火は、懺悔・感謝・精進の生活道は平凡ではあるがそれは確かに人の本道であると考え、この三道は所詮一つであり、「懺悔があれば必ずそれに感謝があり、精進があれば必ずそこに感謝がある」とした。そして感謝は懺悔と精進の娘であって、山頭火はこの魂の娘を浄化することで育んでゆかなければと語る。また、彼は「客観を掘りぬくと主観にぶつかる、彼が我となるのである」として「生命——心——言葉——詩」の流れを説く。また更に「物にこだはらない、物からわずらはされない境地」「流動して停滞しない境地」として「物——心、自然——自己」の物即心・自然即自己を、山頭火は雑感風に記し留めた。それを分かり易く説明すれば、山頭火は自然に心を惹かれる。そして自己を自然の一部として観ると共に自然を自己のひろがりとして観る。また、山頭火は、自然を通して自分を、人間性を、そして自然の調和をうたうと云う。すなわち彼は「自分の句について考へる——私は私をうたふ、自然をうたふ、人間性をうたひ、自然の調和をうたふ、人間に眼醒めしめ、自然を味はせたい⁶¹⁾」からである。

一方、句作の立場から「自然」について、山頭火はどのように理解していたのか。次の一文が見事にそのことを言い放ってくれている。

「俳句は個性芸術。心境の文学である。そして人間そのものをうたふよりも自然をうたふ——自然を通して、自然の風物に即して人間を表現することに特徴づけられる。生活をうたふにしても、人間を自然として鑑賞する境地に立ってうたはなければならない。俳句は、現実没入

しながらも、しかも現実を超越してみなければならない。⁶²⁾」

そして山頭火が「句作が私の一切となった、私は一切を句作にぶちこむ」という時、そこには何を良しとする自己自身の評価基準があったのか。実はその基底根幹には「あたりまへのもの、すなほなもの、ありのままのもの、さういふものを私は尊ぶ⁶³⁾」(『其中日記』昭和十一年)と山頭火自らが本音で語る心があった。尚、「すなほ」に関しては別処で「すなほに——行往坐臥、いつでも、どこでも、すなほに。善悪、生死、すべてに対して、すなほに⁶⁴⁾」(同上、昭和十年)と記し、いつどこでも生活すべてに対して言われている幅広い意味がある。以上をもってここで筆を擱く。

注

- 1) H・D・ソロー著、飯田 実訳『森の生活』上(岩波文庫)岩波書店、2004年、p. 34.
- 2) 同上、p. 95.
- 3) V・E・フランクフル著、山田邦男・松田美佳訳『宿命を超えて、自己を超えて』春秋社、2005年、p. 150-151.
- 4) 同上、p. 151-152.
- 5) 同上、p. 152-153.
- 6) 『森の生活』上、p. 160.
- 7) 同上。
- 8) 同上、p. 161.
- 9) 同上、p. 164.
- 10) 同上、p. 172.
- 11) 同上、p. 175.
- 12) 同上、p. 176.
- 13) 同上、p. 179.
- 14) 同上。
- 15) 同上、p. 202.
- 16) 同上。
- 17) 同上、p. 204-205.
- 18) 木村晴子・島田太郎・斉藤 光訳『H・D・ソロー』(アメリカ古典文庫 4) 研究社、1977. p. 314-315.
- 19) 新保 哲『山頭火のころ』沖積舎、2003年、p. 40-45.
- 20) 『森の生活』上、p. 160.
- 21) 同上。
- 22) 同上、p. 237.
- 23) 同上、p. 240.
- 24) 同上、p. 234.
- 25) 大乘仏教徒は、それ以前の比丘や沙門の小乗仏教徒の立場を声門乗・縁覚乗、あるいは合わせて二乗と称した。これに対する自分たちの立場を菩薩乗と呼んだ。その特徴は、多くの人々を救うことを主眼とする利他行にあった。
- 26) 『山頭火のころ』、p. 44-45.
- 27) 同上、p. 45.
- 28) “Thoreau” *Walden and Civil Disobedience*, p. 267.
- 29) *Ibid.*, p. 262.

- 30) ソロー作, 神吉三郎訳『森の生活——ウォールデン』(岩波文庫) 岩波書店, 1984, p. 273.
- 31) 同上, p. 276.
- 32) 新保 哲『ソロー その生き方』北樹出版, 1989年, p. 106.
- 33) 同上, p. 108-109.
- 34) 同上, p. 113-114.
- 35) 『H・D・ソロー』, p. 127.
- 36) 同上, p. 142.
- 37) 同上, p. 144.
- 38) 同上, p. 158.
- 39) 『森の生活』上, p. 204.
- 40) 同上, p. 205.
- 41) 同上, p. 204.
- 42) 同上, p. 205.
- 43) 同上, p. 224.
- 44) 同上, p. 225.
- 45) 『H・D・ソロー』, p. 303.
- 46) 種田山頭火『山頭火 日記(二)』春陽堂書店, 1989年, p. 59.
- 47) 種田山頭火『山頭火 日記(一)』春陽堂書店, 1995年, p. 137.
- 48) 『山頭火 日記(二)』, p. 96.
- 49) 同上, p. 175.
- 50) 同上, p. 152.
- 51) 同上, p. 134.
- 52) 同上, p. 150.
- 53) 『森の生活』上, p. 237.
- 54) 同上, p. 238.
- 55) 種田山頭火『ぐうたら日記: 其中日記(四)』(山頭火の本 7) 春陽堂書店, 1986年, p. 59.
- 56) 同上, p. 187.
- 57) 同上。
- 58) 同上, p. 163.
- 59) 種田山頭火『山頭火 日記(六)』春陽堂書店, 1989年, p. 134.
- 60) 大山澄太編『山頭火著作集(三)』潮文社, 1996, p. 35.
- 61) 同上, p. 181.
- 62) 同上, p. 188.
- 63) 同上, p. 184.
- 64) 同上, p. 65.

参考文献

- H・D・ソロー著, 飯田 実訳『森の生活』上(岩波文庫) 岩波書店, 2004
V・E・フランクル著, 山田邦男・松田美佳訳『宿命を超えて, 自己を超えて』春秋社, 2005
木村晴子・島田太郎・斉藤 光訳『H・D・ソロー』(アメリカ古典文庫 4) 研究社, 1977
新保 哲『山頭火のころ』沖積舎, 2003
ソロー著, 神吉三郎訳『森の生活——ウォールデン』(岩波文庫) 岩波書店, 1984
新保 哲『ソロー その生き方』北樹出版, 1989
種田山頭火『山頭火 日記(一)』春陽堂書店, 1995

種田山頭火『山頭火 日記(二)』春陽堂書店, 1989

種田山頭火『山頭火 日記(六)』春陽堂書店, 1989

種田山頭火『ぐうたら日記：其中日記(四)』春陽堂書店, 1986

大山澄太編『山頭火著作集(三)』潮文社, 1996

新保 哲『ソローの精神と現代——東西融合論へ向けて』行路社, 1988